

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻83号 平成22年10月1日発行

「修身教授録」探求（第四十八回）

三十三 「我」

森 信 三

「我」が強いということは普通には人として最もよくないこととされており、特に女性の場合には最もよくないことと考えられているようでもあります。また実にそれはその通りでありまして、一切の問題はすべてがこの一事にもとづくものとも言えますよう。そこで女性のなよりの癖は、「我」が強くて、素直さがなくとも言えますよう。いかに美人であつても、またいかに才能がありましても、「我」が強くて心に直さのない婦人ほど世に困りものはないでしょう。実際家庭問題の大部分は、帰るところ、この婦人の「我」に基づくところでも間違いがないでしょう。かように「我」というものは、人間として特に婦人として

は最も困ったものでありますが、しかしこの「我」の強さということも、一面からみれば人それぞれの生まれつきでありまして、何も自分から強いて「我」を強くしようとしている人間は一人もないと言えましょう。つまり生来「我」が強く、利かぬ気の気象に産まれついたとも言えましょう。

さてそれについて私は次のようにも考えるのであります。すなわち人間産まれついで「我」の強さというものは、それ自身としては必ずしも全然いけないというわけではなく、悪いのはそれを自分の生まれつきだからと言って、直そうとしない点にあると思うのです。すなわち「我」が悪いと言われるのは、それをそのままに、横車を押そうとするからよくないのであつて、仮に非常に「我」の強い人でありましても、もし自ら深く反省して、しだいにこれを改めていこうと努めるならば、「我」の強い

生まれつきは必ずしも悲観するに及ばないとも思うのです。否見方によれば、変な申しようではありませんが、人間「我」が強いぐらいでなくては修養も本当のことはできないとも申せましょう。つまりへなへなのお人好しでありながら、真に立派な人間となったという例はまず聞かないのであります。こういう意味からは、偉くなった人はその生まれつきから申せば、元は相当「我」の強かった人が多いといってもよいでしょう。しかしそれはただ生まれつきの生のまゝの「我」の強さをいつまでも振りかざしていないで、卓れた方の教えを聞くことによつてしだいにその教えの光が身に沁みこみ、遂には「これではいけない。いつまでも斯様なことをしては、結局は身の破壊である」と悟つて、その「我」の強さを我が身の修養の方に向けてゆく時そこに初めて本当の人間が出来るのでありましよう。かくして「我」の強さということも、

ひとたびその方向を転ずれば、わが心を磨く動力となり、またかくして洗い清められれば、人様のお役に立つべき力ともなるわけであります。この辺りの趣が分かり出して、これまでの「我」の強さを、我が身を治める修養の上に振り向けるようになりますと、ついにはあのへなへなおひと好しには見られない精神の力強さが現れてくるのであります。実際人間ある意味では、意気地がなくては修養もできるものではありません。ただ意地を意地として人をやつつける方向に使うか、それともこれを我が身を修める方向に向けるか、そこに人間としての大きな岐かれ目があるわけであります。かような次第で「我」の強い人は一旦その方向が変わり出せば立派な人間ともなれるわけでありますが、しかしそのままではどうしても人の嫌われものでありまして、これが妻であれば所謂夫を尻に敷く悪妻となるほかないであります。そもそも

「我」が強いということは、その人に一種の力があるということでありまして、それを自分の利己的な方向に向けると所謂「我」の強さとなり、これに反して、これを人様のお役にたつ方向に振り向ければ、それだけ立派な働きができるわけであります。所謂お人好しの人には、他人の心の底深い気持ちなど察しがつきかねるものであります。が、「我」の強い人は、もちろんそのままでは「我」のために他人の心持ちなど一切かまわずに、おつかぶせてゆきますから、所謂お人好しの人以上に、他人の心持ちの察しなどつかないわけでありまして、その代わりにまたひとたび自己に目覚め出しますと、これまで「我」を張り通してきただけに、却つて多くの人の細々とした心持ちなども解るようになるものです。そこでいまあなたの方の中には、他人から「我」が強くていけないと言われている人も少なくないであります。そういう

人は、その「我」さえ取り去ったならば、多少は人様の御役にも立つ人間になれるかと思つて、大いに努力されるが良いと思ひます。もつとも人間は「我」が強くて、ただ1本調子の間は、自分がいかに「我」の強い人間であるかということは一向に気づかずにいるものであります。すなわち自分勝手なことをし放題にしていながら、当の本人は一向それと気づかずにいるのが常であります。そこでまたひとたび自分の「我」の強さに気づき出すということは、既にそれだけ「我」から抜け出しはじめたと申してもよいでしょう。さらに進んで、自己の言動の一切について、当の「我」の抜け難い事に気づくようになれば、これを外から見れば最早「我」の抜けた人ともなるのです。

そこで現在のあなた方としてなによりも大切なことは、自分がいかに「我」の強い人間であるかということを感じること

ありましょう。ではその「我」から抜け出す手はじめとしては、いったい何から手を着けたらよいかと申しますと、私の考えでは、まず口答えをしないことが第一かと思うのです。すなわちいかに厭な事嫌いなことでありましても、一応はまず素直に聴くということが大切です。かく一応は素直に聴いたうえで、さてこれだけはどうしても聴いたうえで、改めてお話ししてみることが良いでしょう。私はあなたがたの「我」を去る工夫の第一着手点としては、どうしてもまずこれから始めるが良いと思ひます。つまりご両親なり、または兄さん姉さんなどが、どんなことを仰つても、少なくとも一応はまず素直にそれを終わりますでお聴きするということです。それを皆そうせず「だって……」という調子では、人間幾つになつたとて、またどれほど上級の学校に学んだとて、人間としては一向磨か

れたとは言えないでしょう。そして娘時代を斯様な態度で過ごした人が将来家庭の妻となつた時、その生活が如何なるものになりゆくかということは、今更事新しく申さずともお分かりのことでありましょう。総じて修養のことは、眼前一步の手近なところから着手してゆくということが何より大切です。他人から見れば実に些細な言うに足りない見えるような事柄でも、これを自覚によつて実行するとき、その事柄の持つ意義は絶大なるものがあると言えましょう。いわんやこれが「我」というような人間最大の問題にれんかん関するに於いておやです。このあたりに実地修養上の大秘訣があるとも言えましよう。(井上カネ記)

「修身教授録」第四卷同志同行社昭和15年刊・天王寺女子師範における講義から)

森信三先生の短文紹介

微言

「開頭」11号から

森 信三

○無神論者とは神と背中合わせをしている

人間の謂いである。○神は無神論者をも容れて拒斥しない。ただ無神論者自身それに気づかないだけである。○無神論者は例えばパンが食べられるものだと、無神論者自身に気づかない未開人が、パンの山積している倉庫の中でパンに取り囲まれながら餓死に瀕しているようなものである。○マルキシズムには神と悪魔とは共在している。○マルキシズムの宿命的二重性格はその共産的愛と暴力革命の主張との両面にある。○悪魔はついに神に勝ちえぬように、マルキシズムにあってもその暴力革命性はその最終的なるものではありえないであろう。○もしマルキシズムにおいて、この否定的要素が自覚せられたならば、それは最早厳密にはマルキシズムとは言いがたないかもしれない。○従来、マルキシズムの立場から「阿片」と言われることは正当といわねばならぬ。個人救済の立場に立つ従来宗教にあっては、その未来は彼岸的未来であって、現実の歴史的未来ではなかった。このことは従来宗教が彼岸への観念的逃避の立場に立つものとして、それが社会的正義の立場から「阿片」と呼ばれることは、その立場からは決して誤謬とはいえない。○宗教家が自分の立場に「阿片性」のあることを承認し、又マルキストが自らの立場に伏在しているその悪魔性を自覚する時初めて、宗教とマルキシズムという二大真理は一つの現実的調和にもたらされるであろう。○宗教は対自批判絶対、対他批判皆無の立場であり、これに反してマルキシズムは対他批判絶対、対自批判皆無の立場の現実よい。さすれば、これら両者の立場の現実

的統一こそ、今後の最大課題というべきであらう。○現在の宗教家のうち、自らの裡に阿片性の存することを自覚している者が果たしてどれほどあるであろう。○(不明)的要素の介在していることを意識している者が果たして如何ほどあるであろう。○マルキシズムは対自批判皆無だといふときその立場からは定めし異論があることであらう。しかし自己の立場そのものに対する根本反省の行われないうち、その所謂自己批判と称するものは自慰的相対的なものにすぎない。○宗教が対他批判皆無というのは一切を自己に帰すべきことを説いて、制度的悪について一言も言及すること無きことによつて明らかであらう。○宗教とマルキシズムとの統一は民族的回心によるほかない。回心において宗教的真理が生かされるとともに、民族的回心はその主体が民族たることによつて、その客観的実現は必然に制度的表現をとらざるを得ない。○宗教とマルキシズムとの統一は民族的回心によるほかない。回心において宗教的真理と階級的外面的真理と……これら両種の真理の現実における調和的表現は結局民族回心の立場によるの外のない。○民族的回心とは各人が自己の裡に、民族の宿業を内観することである。それは単なる個人的内観の底を抜いて、自己のいのちの底に全民族のいのちの宿業を観することである。人類はかかる民族的回心を通して初めて真の神に接するものである。(「開頭」昭和23年2月号通巻11号)

あとがきに替えて

にわかに東シナ海が緊張しだした。中国はこれを機に自国民を守るとして、尖閣付近に監視船を派遣している。これを常態化して実行支配に繋げる。勿論政府は慎重に対応するだろうが、中国の海洋権益についてはフイリピン・ベトナム・インドネシア・マレーシア・ブルネイ等とも、南沙。西沙諸島の領有に問題が派生している。中国は軍事力を背景に事実上の実行支配を着々と進めている。したがって日本の中国に対する対応は東南アジアの国々を始め世界が注視している。この際不退転の覚悟で中国に対峙し、国際社会に向かって必要な発信を積極的に行わなければならない。日本が甘く見られ事実上尖閣諸島が乗っ取られる事態になれば、後生に禍根を残し日本の国益は坂を転がるように失われる。(二繁)

〒633-0003

桜井市朝倉台東二丁目五三八一八九

臂 繁 一 一 発行

TEL・FAX 0744-451-3422

Email: hiji@ken.jp

http://web1.ken.jp/syushin/

第95回「かよう会」のご案内

日時 平成22年10月19日(火)
18時30分～(毎月第三火曜日原則)
場所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』
「電話」(四ツ橋ビル 管理事務所)
06-6531-3686
交通 地下鉄：四つ橋線四ツ橋駅下車
2番出口へ。歩30秒
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。
テキスト 森 信三著「修身教授録」(致知出版)
2300円(大きな書店で購入)
10/19一道をひらく者(2)
11/16人を植える道
12/21松陰先生の片鱗
参加費 1000円

飛耳長目（ひじちょうもく） 通巻83号 平成22年10月1日発行